

のんびり VRMMO記

まぐろ猫@^{かい ね}灰猫

Illustration: まろ

ロリコン紳士達

ゲーム攻略掲示板で
双子達を熱く語る人々。
その正体は深い闇に
覆われている……。

カレン

ゲーム世界のNPC。
ゴッデス教会のシスター。

サラ

プレイヤーキャラの
エルフ。冒険者
ギルドの受付担当。

ツグミ(九重鶯)

このえ つぐみ
本編の主人公。25歳。
双子の妹達の親代わりで、
ゲーム世界では生産職に。

ヒタキ(九重鶯)

このえ ひたき
双子の妹。13歳。
あまり感情を表に
出さないが、実は
悪戯っ子。

リグ

くも
可愛らしい蜘蛛の
魔物。ゲーム世界で
ペットとなる。

ヒバリ(九重雲雀)

このえ ひばり
双子の姉。13歳。
活発な性格で、幽霊以外は
怖いものなし。

ミィ(飯田美紗)

いいだ みさ
双子の幼馴染。13歳。
戦闘時に性格が一変する
ハードゲーマー。

今、世界中で売り出されているVRMMO【REAL&MAKE】、通称R&M。

R&Mを発売したのは【幻想物語】という日本の小さな会社で、今やVRMMOを語る際には外せない企業へと成長した。

ネットに繋がったパソコンと、専用のVRヘッドセットさえあれば手軽にプレイできる。

そんなお手軽ゲームの人気の理由は、高速演算が可能とする、誰もが1度は憧れるファンタジー世界のリアルな再現だった。

どこまでも広がる大地、己の判断が生死を分ける戦闘、ギルド対ギルド戦、AI（人工知能）搭載でより人間らしいNPC。そして、職業総数1万×各種スキルという、無限大の可能性！

『もう1人の自分を作り出せ！』

そんないささか壮大過ぎるゲームのプロモーション映像を妹達に見せられたんだが、大してゲームをやったことがない俺、九重頼に一体何をさせようと言うんだ？ まあ、ある程度予想は付くけど……。溜め息をつきたい気分を抑え、俺は少々興奮気味の妹2人に視線を向けた。

「とりあえず、人の部屋に入る時はノックしろ。いつも言ってるだろう？」
「うっ、ごめんなさい。でも、つぐ兄に大事なお願いがあつて来たの！」
「ん、大事。すぐ大事」
「……はあ、大方このゲーム買えってんだろ」

ゲームのプロモーション映像が流れるノートパソコンを持ちながら、一回りも歳の違う双子の妹達のうち、姉である九重雲雀が期待の眼差しで訴えた。

その隣には妹である鵜が立っており、ずっと後ろ手に持っていたらしい紙袋を俺に見せる。そこには大手家電量販店のロゴマークが印字され、いつも冷静な彼女もどこか誇らしげ。

俺は思わず、我慢していた溜め息を漏らしてしまった。

右に髪を結ってるのが雲雀、左に髪を結ってるのが鵜だ。一卵性の双子なので顔は同じだが、性格や話し方が違うので、慣れれば見分けは簡単だと思う。

雲雀は元氣いっぱい、鵜はやや感情の薄い口調が特徴だ。そして、雲雀が俺のことを「つぐ兄い」と呼ぶのに対し、鵜は「つぐ兄」と語尾を伸ばさない。

2人とも柔らかい黒髪で、明るい色のぱっちりした目をしている。幼さが強調された丸顔で、我が妹ながら可愛らしい容姿だ。

双子は母親似なので、父親寄りの俺とはあまり似ていない。まあ、当たり前だけど。

「違う。ゲームならある。つぐ兄に金銭的な負担を強いることはない」

「？……は？」

「この間、つぐ兄がいない時、お父さんにねだって買ってもらいましたー！」

「……何やってんだ、あのクソオヤジ。あとで母さんに電話してやる」

「お父さんは娘に甘い。これは常識。ちよろい」

俺は盛大に溜め息をつき、頭痛の種となりつつある親父に内心で文句を言った。

母さんにチクって、今度赴任先から帰って来たらアイツの料理だけ抜きにするか。そんな考えがいつもは朗らかに笑う母さんだけど、怒った時は怖い一言に尽きる。取り付く島もない。

頭を過る。

「でも、だったら俺に言う必要ないんじゃないか？ 買っちゃったものは仕方ないし、お前達はゲーム好きなんだから自分でやれるだろう？」

俺はふと首を捻った。テレビやパソコン、ソフトがあればゲームはできるのだし、俺は要らないだろう。ちよつと言いは悪いけど、勝手にやればいいのだ。

そんな疑問も双子はお見通しだったのか、雲雀が上機嫌で口を開く。

「ふっふっふ。何故やらないか、そ・れ・は……」

「私達は13歳、レーティングに引つ掛かった。15歳以下は、20歳以上の人と同伴じゃないとプレイできない。無念」

「ひいちゃん、私が言おうとしたのに酷いよお。まあそんな訳で、つぐ兄いのお力添えをつー！」

片手にノートパソコンを持ちながら、答えを溜めに溜めた雲雀は、焦れた様子の鵺に肝心の台詞を言われてしまった。そのせいか一瞬情けない表情をするも、パソコンを持っていない手を顔の前で立て、俺を拝む体勢となる。

なるほど。だからそんなに必死なのか。

「……どうせ嫌だつて言っても、大方ずつと説得し続ける気だろう？ 俺が首を縦に振るまで」

「うん、よく分かったねー」

「お風呂、背中流す。妹の色仕掛けは兄に効く」

「……どこでそんな知識手に入れるんだ、鵺」

「ふふっ、乙女の秘密」

仕事中も、買い物中も、料理中も、風呂に入ってる時すら説得しに来る2人の姿が目には浮かぶ。ふーむ。15歳以下は20歳以上の同伴が必要とか、そもそも大丈夫なゲームなのかね？ 倫理的にヤバかったりしないのか。

今日は土曜日で、時刻は午前11時を少し過ぎたところ。仕事がない実のにんびりとした休日のため、朝飯と昼飯は兼用のつもりだった。

俺は自室のソファに座り、返事をまだかまだかと待つ妹達を眺めて、しばらく沈黙し思考を巡らせてから口を開く。

「分かった。ただし、お前達に悪影響がありそうならすぐ止めるからな？ あと、俺にゲームの腕を期待するなよ」

「やつ、やったー！ つぐ兄い、ありがとうー！」

「一緒にできて嬉しい。つぐ兄の気持ちが変わらないうちに、すぐ準備する」

俺の言葉にピョンピョン跳ねて喜ぶ雲雀。口元を緩めていそいそと俺の隣に座り、紙袋からゲームを取り出して準備する鵺。

行動力の高さにお兄ちゃんは脱帽しちゃうよ。ゲーム好きなのは誰に似たのか。

俺は鶏から、すぐ格好いいヘッドセットを手渡された。

これはこのゲーム専用のVRハードという機械で、頭に装着して、横にあるスイッチを押せば仮想世界に入ることができる。

もちろん、ネット回線のあるパソコンに端子たんしを繋げないと意味がないらしい。R & M専用ヘッドセットなので、他のゲームでは使えない。

使用中は脳波が管理され、現実で身体を動かしているのと同様の感覚を得られるそうだ。

ということは、俺は人と比べて運動が得意ではないのだが、それは仮想世界でも同じなのか……。ふむ、ちよつと残念。

「つぐ兄い。歳、外見、性別は現実が反映されるからね？ ああでも、人外系の職業を選べば固有装備があるから、人間とはかけ離れた外見になれるよ！」

「……へえ、最近のゲームは本格的なんだな」

「無理に性別を偽いつわることはできるけど、それはただのオカマさん」

「……それは、嫌だな」

「私達がつぐ兄守る。一緒にキャラメイクするから、頑張がんばろう」

「はいよ」

「じゃー、ログインするよ！」

そして俺達3人は、ヘッドセットに付いたボタンを押した。すると意識が沈む感覚に襲われ、目の前が真っ暗になる。

初めての体験に、俺は多少の心地悪さを感じた。



不意に意識が浮上する。真っ白な部屋の中だ。隣に双子がいるのを確認して、俺はあたりをキョロキョロと見回した。

目ぼしい物は特に何もないな。壁一面が真っ白で統一されているので、距離感がつかめない。俺は自身の手を眺め、握ったり開いたりを繰り返して首を捻る。

「ここがゲームの世界？ ふむ、どう見ても俺の手だ……」

「……ハッ！ よつ、ようやく私が憧あこがれた、R & Mの世界に来たー！」

「落ち着け、雲雀」

「……雲雀ちゃん、ここはまだ玄関口。キャラメイクしないと」

興奮気味の雲雀に対し、すぐに冷静さを取り戻した鵜が手をかざしながら「キャラメイク！」と高らかに宣言する。どうしたらいいのかわからないので、俺はじつとしていよう。とりあえず双子に任せたほうがよさそうだな。

すると突然、真つ白だった部屋にサイバーチックな光が走り、目の前に、半透明に色付けされたウィンドウらしき物が音もなく開いた。

続いて、優しそうな女性の声が響き渡る。

「15歳以下のプレイヤーを確認。20歳以上のプレイヤーの引率を確認。ようこそ「REAL & MAKE」の世界へ！ わたしはメイク部屋の案内人でもあり、この世界を見渡す者。R & M、それはもう1人の自分が織り成す物語。何をするのもあなたの思うまま。さあ、手元のウィンドウに情報を入力して、わたしの創り出した世界、ラ・エミエールを冒険しましょう！」

「おー、胸がドキドキするねー！ 早速作ろう！」

「雲雀ちゃん最初に作って。わくわく、わくわく」

「俺は最後だな。ただでさえゲームするのとか久々だから、2人を参考にしないと……。手伝ってくれるか？」

「もちろん！」

雲雀が張り切った声を上げた。そして、どうやら鵜も張り切っている。

普段通り無表情のままだが、心情が口に出ている。いつも年齢に似合わず落ち着いているので、こんな鵜を俺は久しぶりに見た。

「あ、15歳以下の女の子限定職がある！ ふっふっふ、コレとアレでー」

「雲雀ちゃんはタンク職を目指す。タンクは皆の盾^{みなたて}。敵の攻撃にひたすら耐える。一番大変。だれ^やど遣り甲斐^{がい}がある職業」

「へえ、そういうことまで考えるのか。奥が深い……」

テンションの高い雲雀の話にはついていけなかったが、助けを求めて鵜を見れば、俺でもどうにか分かるように話してくれた。とりあえず、タンクは大変な職業だと覚えておこう。

しばらく待つと、雲雀のキャラメイクが終わったようで、誇らしげに胸を張りながら、俺と鵜にウィンドウを見せてきた。

「私達が15歳以下なのは変わらないし、3人で固定PT^{パーティ}なのは決定だもんね。うん、でーつきた！」

「私は身軽さを重視する。索敵、忍び寄って敵を後ろから狩る。雲雀ちゃんとお揃いの職業、限定職も入れて……完璧」

「私は身軽さを重視する。索敵、忍び寄って敵を後ろから狩る。雲雀ちゃんとお揃いの職業、限定職も入れて……完璧」

「回復しながらのタンク役って、私の夢だったんだ！ ファイターは盾騎士狙い、天使を育てればある程度魔法弱点がなくなるし。んー、完璧！」

「回復しながらのタンク役って、私の夢だったんだ！ ファイターは盾騎士狙い、天使を育てればある程度魔法弱点がなくなるし。んー、完璧！」

REAL&MAKE
リアル アンド ナイフ

【プレイヤー名】
ヒバリ

【メイン職業/サブ】
見習い天使レベル1/ファイターレベル1

【HP】198/198

【MP】74/74

【STR】24

【VIT】26

【DEX】17

【AGI】18

【INT】19

【WIS】14

【LUK】23

【スキル5/10】
剣術1/盾術1/光魔法1/
HPアップ1/VITアップ1

【控えスキル】

【装備】
石の剣/木の盾/冒険者の服(上下)/
冒険者の靴/見習い天使の羽

REAL&MAKE
リアル アンド ナイフ

「おお、気配察知は大事だねー。ひいちゃん、頼りにしてるよ！」
「任せて」
「さ、次はつぐ兄いの番だよ！ うーん。つぐ兄いは、どんなキャラにしよっかねえ？」
「生産系、でも戦える。……つぐ兄は運動音痴。ティマー系？」
「ティマーいいね。つぐ兄いと可愛い魔物、絶対似合うもん！」
「ん。溢れ出るつぐ兄の色気で魔物を籠絡する」
「……は？ え？ よく分からないが、それで大丈夫……だと思っ。あと、俺は運動音痴じゃなくて、運動が得意ではないだけだ」

2人は俺のウィンドウを見ながら、あーでもないこーでもない話し始めた。
職業に合わせたスキル選びがとても大事で、今選ばないものは、買いかクエストでしか手に入らないそうだ。俺はよく分からないけど、2人はゲームについてきちんと調べてたんだな。
あと、繰り返すけど俺は運動音痴じゃない。そりゃ体育の成績はギリギリだったけど、一応人並みのはずだ。
2人に頼りながらウィンドウの空欄を埋め、それを見返してみる。やっぱりよく分からないが、とりあえず確認。

REAL&MAKE
リアル アンド ナイフ

【プレイヤー名】
ヒタキ

【メイン職業／サブ】
見習い悪魔レベル1／シーフレベル1

【HP】153／153

【MP】87／87

【STR】16

【VIT】14

【DEX】23

【AGI】25

【INT】16

【WIS】21

【LUK】19

【スキル5／10】
短剣術1／気配察知1／忍び歩き1／
闇魔法1／DEXアップ1

【控えスキル】

【装備】
石の短剣／冒険者の服（上下）／
冒険者の靴／見習い悪魔の羽

REAL&MAKE
リアル アンド ナイフ

「か、かわのむち……」

ステータス画面で、装備の欄に目が留まってしまった。妹達の説明によると、選んだ職業によって、使用可能な武器がランダムで1つもらえるらしい。

錬金士は分厚い本で、ティマーは革の鞭……ぶっちゃけ、どっちの武器をもらったとしても大差ないような。

「ん、つぐ兄は装備品に付加^{ふか}を付けたたり、ポジション作ったり、おいしい料理を作ったり」

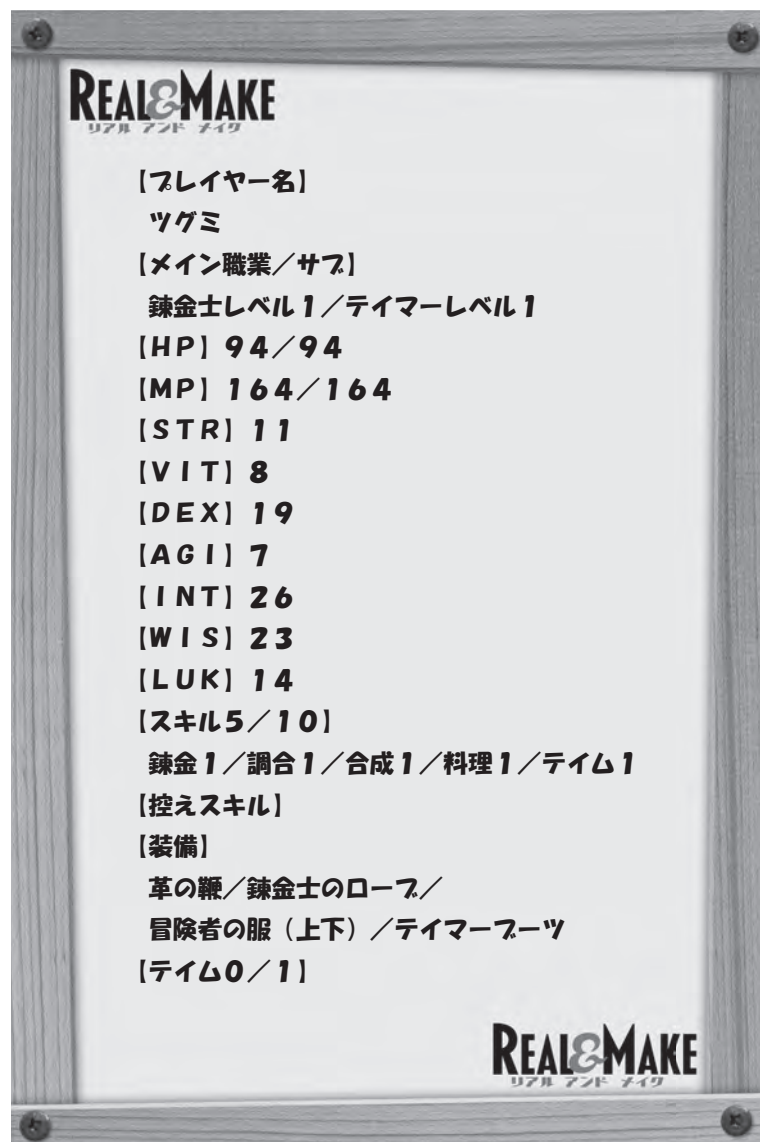
「あ、このゲームには、満腹度^{まんぷくど}と給水度^{きゅうすいど}があるからねー。ゲージがなくなる前に、食べ物と飲み物を口にしなきゃいけないって決まりなんだ。だからつぐ兄いの料理には、色々とお世話になりますっ！」

「ふーん……あ、最後に設定があるぞ」

分らないことはかりだが、2人がこんなに嬉しそうなのだからまあいいか。結局のところ、楽しんだ者勝ちだ。2人の様子から、ちょっとだけ学んだぞ。

メイク完了のボタンを押すと、最後に設定を変更する画面が映し出された。

妹達に勧められるまま、「PVP対象不可」「PK対象不可」「残酷な描写減^{ざんこくなびょうしや}」のチェックボックス



スにレ点を入れた。

変な人に絡まれた時の対策、そしてグロテスク耐性のないであろう俺への配慮らしい。

最後に完了ボタンを押せば、先ほど聞こえた優しい女性の声が、再度響いた。

「引率者のログアウトは、全員のログアウトとなります。15歳以下の方とはぐれた場合の緊急措置としてご活用ください。では改めて、ようこそ「REAL & MAKE」の世界へ。わたしはあなた達を歓迎します！」

その言葉の約5秒後。視界が真っ白に染まり、またも意識が沈んでいく。
今度はそこまで不快ではなかった。慣れてきたのか、仕組みが違うのかは分からない。



——あたりがザワザワと喧騒に包まれている。ゆっくり目を開けば、俺は石畳が敷かれた噴水のある広場に佇んでいた。

よく見ると、噴水の水飛沫1つ1つが、細かく再現されていることに気付く。

俺はかつて大学の資料で見た、中世ヨーロッパにこのような錯覚に襲われた。

「……すごいな」

目の前を歩いて行く、武器を腰に提げた冒険者。行商人の露店が集まった広場に買い物に来たであろう主婦。木の棒を持って走り回る子供。石や煉瓦で出来た建物は本物にしか見えない。

俺の髪を爽やかな風が優しく撫でた。その風に乗る、露店で肉が焼かれる香ばしい匂いもする。思わず感嘆して呆然としていて、不意に両腕に重みが掛かった。

その慣れた感覚にはっとして視線を向ければ、そこには雲雀と鵲。

「つぐ兄い、すごく綺麗でしょう？ 謳い文句通り、まさにもう1つの世界！」

「ああ……これならみんながやりたがる訳だ」

してやったり、という表情を浮かべる雲雀に向かい、俺は素直に頷いた。

「もう1つの世界」と、ゲーム会社が大々的に謳うのも分かる。どれが俺達と同じプレイヤーで、どれがゲームの用意したNPCなのか、見分けが付かなかった。

「R & Mでは、ある程度のこととは自由にできる。私は2人といられるならそれでいい」



「つぐ兄い、とりあえず簡単なことから説明するね。そのベンチ座ろうか」

雲雀は腰に石の剣、左腕に木の盾を装備。動きやすそうな半袖の上着に、短パンと靴を身に付け、さらに真つ白な小さい羽を背中^{ふともも}に生やしていた。

鵜は太股^{ふともも}にベルトを巻き付け、そこに石の短剣を差している。服と靴は雲雀と変わらないものだ。そして背には、真つ黒い蝙蝠^{こうもり}を模した小さな羽があった。

羽は動くらしく、2人の動きに合わせてかすかに羽ばたいている。

俺はというと、服こそ双子と変わらないが、腰には何の役に立つのか不安しかない革の鞭。あとは大きなフードが付いた白いローブと、編み上げブーツだ。

フードを被ったら完全な不審者になってしまう可能性があるので、無闇^{むやみ}に被らないようにしよう。

「えーと、まずこの地理の説明でしょ。アイテム補充^{ほじゅう}、今日は何するか、あとは……」

「システム説明も。現実とこの時間差、その他諸々^{もろもろ}。いっぱいある」

「雲雀、鵜。俺は保護者だが、お前達が遊ぶのを制約しようとは思ってないからな？ これだけ覚えてれば大丈夫、って内容を教えてくれればいいよ」

「むーっ、私はヒ・バ・リだよ、ツグ兄い。あと、ツグ兄いを蔑^{ないがし}ろにするのは嫌！」

「私はヒ・タ・キ、ふふっ。ツグ兄のために簡潔^{かんけつ}に説明する」

頭を抱えながら唸^{うな}っていたヒバリが、頬を膨らませて怒った。一方のヒタキは、どこか面白そうに小さく笑った。

呼び方のニュアンスで怒られたらしい。どうやらゲームの中では、ちよつと違う2人になりたいようだ。よく分からないけど。

ヒバリより説明がうまいヒタキに教えてもらい、設定を頭に詰め込む。自分なりに纏^{まと}めると……。

広大な世界ラ・エミエール。今、俺達がいる街アースは通称「始まりの街」と呼ばれ、冒険者となったプレイヤーは例外なく、この地点からのスタートになるらしい。

何故かと言われても、それは運営と大人の事情……とのこと。

冒険者として魔物を倒し名声を得るもよし、商売を始めて富を築くもよし、鍛冶屋^{かじや}になろうが農業をしようが構わない。極端な話、王様にも魔王にもなれる。

自由度が高過ぎて、何かしら目的がないと駄目な人にはオススメできないゲームらしい。

システム面では未成年への配慮^{はいりよ}が施され、ゲーム内での飲酒は20歳以上、そして全面禁煙。

どうやって年齢を見分けるのかと言えば、高速演算と脳波測定を用いて、最後の砦^{とりで}であるA Iが頑張ること。……A I頑張れ。

18歳以下へのハラスメント行為は1発退場、つまりアカウント削除になる。1人1アカウントし

か取得できないらしいので、2度とプレイ不可能みたいだ。

18歳以下にビクビクしなきゃいけないのか、という論争もあったらしいが、プレイを監視するA Iがいるらしく、公平な判断を下してくれるとか。

こつちもA I頑張れ。超頑張れ。でも結局、最終決断を下すのは運営だからな、運営も頑張れ。

ゲーム世界での1日は現実世界の30分で、連続ログイン可能時間は7時間。

健康への考慮から、直前にログインしていた時間と同じだけ間を置かないと、再ログインできない仕組みになっている。ゲーム内では元気でも、現実で病気になるったら世話がない。

そのためか知らないけど、R & Mの料理全般はあまりおいしくないらしい。

ゲームの食事で満足して、現実を疎^{おろそ}かにするな、っていう警告かな？

話は逸^それるが、病気などで身体が不自由な人向けに、病院がこのゲームを導入してたりもするらしい。実際には足が動かなくても、脳の電気信号を読み取ればゲーム内では歩ける。技術の発達はすごいな。

P v Pは、最初の設定で不可にチェックを入れた俺達は申し込まれない。

またP K不可なので、攻撃を受けても、1ダメージも入らないんだと。子供プレイヤーは狙われやすいらしいし、そうしておいてよかった。

残酷な描写も抑え目の設定。魔物を攻撃しても血は出ず、倒した際は光の粒となって消える。

あと、魔物の姿かたちがちよつと可愛らしくなるとか……これはプレイヤーも同様だ。

最後にステータス画面を開くと、右下に【R & M攻略掲示板】【運営へのお問い合わせ】【ログアウト】というボタンが並んでいた。

攻略掲示板は、ゲーム内で閲覧したり書き込んだりできるらしい。めちやくちやお世話になると2人が言っていたので、暇な時にでも目を通しておう。

「……ふう。今私が言えるのはこれくらい」

「ありがとう、ヒタキ。あとは疑問が出た時に、質問させてもらおうよ」

「じゃあ話は終わりだね！ 道具屋に行つてアイテムを揃えて、早速街の外に行こう！」

長い説明を終え、ヒタキは少々疲れた様子で息をついた。

俺が^{いたわ}するように頭を撫でると同時に、ヒバリがぴよんと立ち上がる。どうやら長い話に退屈していたようだ。

俺とヒタキも、ヒバリに急かされるように腰を上げ、歩きながら話す。

「フレンド登録完了。PT固定化済み。所持金は私達が1500M^{ミユ}ずつ。ツグ兄が6000M

「ん？ 俺の方が断然多いな？ 成人済みの人間が財布の紐^{ひも}を握れ、つてことか？」

「そうかもねー。私は無駄遣いしちゃうと思うし、ツグ兄いに任せとこー」

ゲーム内通貨は何とも可愛らしい呼び名のM（ミユ）だ、覚えないと。

ステータス画面を開きながら色々と確認しているヒタキを横目に、あたりを見渡す。

噴水広場から続く大通りには大勢の人が繰り出し、露店の数もすさまじい。活気溢れる場所なんだろうけど、初心者俺は圧倒されてしまう。

……何だか周りの冒険者にジロジロ見られている気がするんだが、妹達はお構いなし。

5分ほど歩いているとヒバリが道具屋を見つけ、中に入って行く。

ドアには小さなウェルカムベルが付けられており、可愛い音を鳴り響かせた。

「わあああー、ファンタジーのお店だねえ！」

「満腹度と給水度の回復用に携帯食料、水筒^{すいどう}は必須。ポーション、状態異常回復薬、ツグ兄のスキル上げ用に鍊金^{れんぎん}、調合、料理セットが欲しい」

「薬草、毒消し草ねえ……。意外にいい値段するし、何を買うかちゃんと吟味^{ぎんみ}しないとな」

「あ、私は光魔法メディ（小回復）があるから、あまりポーション要らないかも？」

本造の道具屋は都会のコンビニ程度の広さ。壁の棚には雑多^{ざつた}に物が並んでおり、ヒバリは目を輝かせた。

もちろん道具にお金を掛けるのはいいが、破産^{はさん}しては元も子もない。それくらいは俺でも分かる。

「下級ポーション」×3

薬草を煎^{せん}じた汁を硝子瓶^{がらすびん}に入れた物。HP30%回復。売値250M。

「毒消し草」×3

魔物の毒を治す草。苦い。売値80M。

「携帯食料」×6

栄養満点。満腹度回復。味はない。売値50M。

「水筒（小）」×3

300ミリリットルの容量。給水度回復。売値300M。

「初級錬金セット」×1

釜、台、かき混ぜ棒が付いたお得な初級錬金セット。売値500M。

「初級調合セット」×1

乳鉢^{やげん}、薬研^{やげん}、薬包紙、秤が付いたお得な初級調合セット。売値500M。

「初級料理セット」×1

包丁、まな板、フライパンが付いたお得な初級料理セット。売値500M。

これら全部で3690M也^{なり}。初期投資にはお金が掛かるので、これくらいは仕方ないだろう。

日向ぼつこしながら店番をしていた優しげなお婆^{おばあ}さんに、水筒に水を入れてもらった。

道具屋を出て、3人で均等にポーション類を分けた俺達は、街の門へ向かう。その際、俺はアイテム欄の見方を教わった。何とかなりそうだ。

重機などがないこの世界では、長い年月をかけて石を積み上げるしかないであろう立派な街壁に近付くと、ますます喧噪^{けんそう}が増していく。

「火魔職^{ひまじく}です！ PT拾^{ひろ}ってくださいあゝ」

「鉄装備売ります！ 値段は交渉で」

「ギルド【南瓜^{かぼちゃ}の煮^かつ転^まがし】に入りませんか？ 初心者歓迎です！」

様々な冒険者プレイヤーが、街の外に向かう同じ冒険者へ叫んでいる。よく分からない俺は、妹達の後ろに付いて行くしかない。

立ち読みサンプル はここまで

「まずは3人でレベル上げしたいよねえ。無理にPT人数増やして、嫌な思いしたくないしさっ」

「近寄って来る人はきつと15歳以下目当て。ロリコン、駄目、絶対」

「俺は何しづらいか分からないし、ヒバリとヒタキが楽しければそれでいいぞ」